

# 真実の鏡



ほびぷぺ

トキオファンタジー  
フ★ア★ル★

## 出立前夜

---

黄金の砂と潮の香りが、乾いた風にふんわりと運ばれてくる。

うだるような熱気につつまれた昼間とはうってかわり、砂漠に囲まれたここエルパでは、夜は心地良い風が吹きぬける。

そんな心地のよいひととき、町人たちが早くに寝静まるはずもなく、窓越しに遅くまでちらちらとあかりが灯るところも珍しくはない。

そしてとりわけ、ラシードの経営する酒場は町のはずれに位置しながらも、連日連夜の大盛況であった。

「エリアスに帰るですってえー!？」

だん、と勢い余ってテーブルにたたきつけたジョッキの中から、ミルクが少し零れる。

息巻いたのは、酒場という場所が...もっと言ってしまえばここエルパにいること自体が似つかわしくないと思える、黒い豊かなウェーブの髪を持ったまだ成人にも満たない少女であった。

名は黒月姫。アオイチの姫君にして、現在はイリス・イヴィエールと共に世界を魔の手から救うべく旅を続けている。

「ほらほら、姫様ともあろう方が。ミルクが零れてるじゃないの〜。」

そう隣からたしなめるのは、その黒月姫よりほんの少し年上に見える女性、ジョアン・ファーム。すらりと伸びた褐色の手が、早速どこからか取り出されたハンカチで手際よく零れたミルクを拭う。

「ごめんね、黒月姫。でもなんか...ただ事じゃないみたいだし。ほっといたら、また前みたいにエリアス全体に危険が及ぶこともあるかもしれないから。」

思い切り不満気に反発されてばつが悪そうに続ける彼女こそ、イリス・イヴィエール。

彼女はまだ少女と形容される歳にして、しかし既になかなかの有名人であった。

生まれ持った宿命のままに育ちの町ベロスを旅立ち、王都エリアス、龍京、そしてアオイチと行く先々で邪悪な妖怪、アガシュラに苦しめられる人々を救ってきた。

白銀の長い髪に深紫の瞳をたたえ、一見控え目そうに見えるも、その瞳の奥にはしっかりとした意志の光が宿っている。

多くの仲間が旅を経て彼女のもとに集っているのも、その彼女のもつ特有の人徳ゆえであった。

「...ふん、そんなハヌイなんていう爺、わらわは知らぬわ。」

たしなめられて多少は落ち着いたもののなおも不服そうな黒月姫は、串焼きを頬張りながら悪態をつく。

「そりゃあそうだ、姫さんとはアオイチからの仲だからな。なあ、イリス？」

茶化すように銀髪の少女に視線を投げかけたのは、少女たちより幾分か大人に見えるドレッドヘアの青年、カズノ・ナス。

イリスはカズノの言葉にほだされたように柔らかく笑うと、「他のみんなは、どうかな。できたら行って、様子だけでも見てきたいんだけど...許してもらえるかな？」そう言って、テーブルを囲う仲間たちを見回した。

事の発端は今日の日暮れ時、伝書鳥がエリアスからの文をイリスのもとに届けたところからはじまる。酒場にて落ち着いた後にその文を広げれば、そこにはこのように書かれていた。

エリアスの生き字引とも言われる高名なハヌイが行方不明になった。

恐ろしいことに、夜中に尋常ならざる気をまとって闇の森の方面へふらふらと歩いて行く姿が目撃されている。

本国騎士団が搜索したが、闇の森内においては本人を発見することはままならなかった。

考えにくいことであるが、その先にあるポウ邸宅の方まで行ってしまったのかもしれない。

ポウ邸宅はエリアス周辺よりも非常に強力な魔物の棲みついた危険な場所であり、先の戦いで疲弊した本国騎士団では探索に向かう余力はない。

しかし、このハヌイの失踪がアガシュラの暗躍による可能性は十二分にある。

もし可能ならば、そなたらの腕を見込んで、ポウ邸宅に赴き、ハヌイを搜索するとともに現状を確認してきてもらいたい。

しかし、そなたらにも使命があることはわかっているから、決して強制はせぬ。

そしてその文末には、エリアス王ラジャータの直筆のサインがしっかりと添えられていた。

「普通に考えれば、一民間人があの闇の森を抜けるのは不可能でしょうね。何か裏があると考えれば...戻って確かめることも必要かと思います。」

イリスの問いかけにそう淡々と答えるのはレビ・アレンス。若くしてエリアス王室の騎士団長まで上り詰めた、眉目秀麗な青年である。

「その上に年寄りだ。足を踏み入れた途端にフラワースネークにでも噛まれてそこで終わりっていうのが関の山だろうな。それこそ普通に考えれば。」

またも茶化すように言うカズノに、

「でも要するに...し、死体も見つからなかったってことだよ。すぐ搜索したのに。」

イリスの最初からの仲間で最年少のナ・ムーウェンは不安げな声を漏らす。

「だから確かめにいくんでしょー！まったく、怖がりなんだから。」

そうムーウェンに対してむくれて見せるのは、ジョエ。ムーウェンといつも共にある、巻物に宿った精霊である。

「まあ怪しげなオーラ漂わせて森に向かう姿が目撃されてたのよね？その上行方不明じゃあ、アガシュラの関与を疑いたくもなるわね〜。」

ねえ、姫？と確認するようにジョアンはからからと笑う。

「でもエリアス王直々のご依頼とあっちゃあ、よっぽどのことでもなきやお断りするわけにもいかないよなあ。すごいんだな、あんたらって。」

大げさにそうってみせるのはパン・ギウ。ここエルパに至る道中の砂漠地帯で出会ったばかりの青年である。

パンの言うとおりで、とイリスは思った。

こうやって一応皆の確認をとってはいるものの、ジエンディア大陸の王都エリアスの王直々の依頼である。基本的に、拒否権はないと思っていい。

実際のところ、イリスたちは既にアガシュラの計略に陥れられたエリアスを窮地から救ったという功がある。

そして、エリアスを旅立った後でも、行く先々でイリスたちが活躍していることは、ラジャータをはじめとしてエリアスの民も知るところであろう。

だからこの書簡にあるように、断ったところで無理強いをしてきたりそれどころか処罰を与えるようなことをラジャータがするはずもないことはわかっていたが、それでも今やエリアスの発展があってこそその各地の活気と平穏があることは自明であり、そのエリアス王から投げかけられた頼みを断ることなどできようはずもないのだった。

エリアスはちらり、と黒月姫を見やる。

思い切り反発したのが自分一人だったのを知ってか、「まあ、レビ様がそういうんだったら、別に行ってあげるのもやぶさかではないというか、なんというか...。」と、ばつが悪そうに呟いている。

そして隣でにやにやと笑っているジョアンに気づくや否や、「そちは何がおかしいのか！行くと行っておろうが！」と顔を真っ赤にしてむくれた。皆が一時の緊張から解き放たれたかのよように、どっと笑う。

「ありがとう、みんな。それじゃあ今日は遅いし、出発は明日にしましょう。」

イリスの一言に、皆一様に頷く。

それぞれに全く性格も違い、境遇も違い、生きてきた道のりも違う。

しかし、それでもこうやって楽しいひとときをすごし、同じ道を歩んでくれる。

そんな仲間たちと共にあれることに、イリスは小さな喜びを感じていた。

「ここが...エリアス。」

活気のある町並み、その中央に鎮座する荘厳な王宮。

黒月姫は初めて見る景色に思わず呟いて、それからはっとして口をつぐんだ。

「あなたは...エリアスがはじめてでしたか。」

しかし、密かにあこがれているレビにそう言われてしまって、他の相手ならば「うるさいわね！」と喚きたてるどころを「ええ、まあ」と俯きがちに小さく返事することしかできないのだった。

「姫はアオイチはおるか黒月城からもろくにでたことないものね〜。」

そんな黒月姫の内心を知ってか知らずか、更に追い討ちをかけるようなことを言うジョアン。案の定「そ、そんなことはない！余計なことを...そちはもうちょっと主に対する配慮と言うものを...！」と赤くなって反論する黒月姫。

主従というよりも姉妹のような、唯一無二の親友同士のようないつもの二人のやりとりに、イリスも目を細める。

「まずラジャータ様にお会いしましょう。それでもう少し詳しい話を聞かなくちゃ。」

全員がタウンポータルから出てきていることを確認して、提案する。

皆は頷き、一行はエリアス王宮へと歩みを進め始めるのだった。

「おお、イリス。よく来てくれた。少し見ないうちに随分仲間が増えたな。しかもそなたはアオイチの...。」

イリス一行が尋ねてくるや否や、ラジャータは立ち上がり興奮したように話し始めた。

「アオイチの一の姫、黒月。ラジャータ様に拝謁致します。」

優雅な身のこなしで丁重に畏まって見せる黒月姫。こういうところはやっぱり姫なのだといリスは改めて実感したが、後ろからひゅう、とかすかな口笛の音が聞こえたのを鑑みるに、他の仲間も大方似たようなことも思ったのだろう。

「おお、やはりそうか。アオイチの姫君まで味方に引き入れるとは、イリスの功、人徳も噂以上ということか。さあさあ、皆の者、面を上げよ。今日頭を垂れねばならぬのは我々エリアスの民のほうだ。」

いつになく饒舌になるラジャータを見るに、やはり伝書では無理強いさせぬとはあったものの相当今回の件が気がかりだったに違いないといリスは思った。

「ラジャータ様、早速ですが、詳しいお話をお聞かせ願いたいのです。」

イリスの言葉に、玉座に座りなおしたラジャータはうむ、とうなずくとおもむろにその右手を上げた。

控えていた家臣の一人が、一つの巻物をもってラジャータの元へ向かい、献上する。

ラジャータは荘厳な面持ちでその巻物を受け取ると、口を開いた。

「ここに、事件の内容が記されておる。しかし...詳しいことは本当に何もわかっていないのだ。」

そう前置きした上で、ラジャータは続けた。

行方不明になったのは、ハヌイという老人。

長命でありながら健康そのもので記憶もしっかりしており、その豊富な知識は町者のみならず王室から頼りにされることもあるほどである。

普段は町に出ている夕刻には帰宅しているが、あるとき、いつまで経っても帰ってこないで心配だという申し出がハヌイの家族よりあり、搜索を開始。

それと日を同じくして夜間、ある町人がエリアス闘技場付近でハヌイを目撃している。

「こんな時間にこんな場所にいるなんて珍しいですね」と声をかけるもハヌイはそれに反応することなく、闇の森の方面へ向かって進んでいったのだという。

辺りが暗かったため最初はわからなかったが、よくよく見ればその通りすぎていくハヌイの後ろ姿はどす黒くうねる怪しげな気をまとっていて、そのためその人物は恐ろしくなって騎士団に報告に行ったのであった。

報告を受けて騎士団が闘技場周辺や闇の森の入り口から中ほどまでを探索したが、もはやハヌイの姿は影も形も見つからなかったという。

「大体、手紙に書いてあったことと同じだね...。」

と、新しい手がかりを期待していただけに項垂れるムーウェン。

ラジャータは「すまない。」と申し訳なさそうに目を伏せたが、その次の瞬間、思い出したようにはっと顔を上げた。

「そういえば、関係あるかはわからんが...」

そう言った後再び右手を掲げると、また別の家臣が盆に乗った何かをラジャータのもとに差し出した。

「いつもハヌイがいたエリアスの住居地域...あそこにこれが、落ちていたのだ。」

「そ、それは...。」

イリスたちがそれが何かをはっきりと確認する前にいち早く表情を曇らせたのは、レビであった

。

「レビ様？」

いつものレビらしからぬ様子に黒月姫が不安げに声をかける。

しかしレビはすぐにいつもの表情に戻り「いえ...なんでもありません。」と言うに留まるのだった。

「これは...薔薇？」

差し出されたものは、イリスにとっては意外なものであった。まさかこの花が、何かの手がかりになるというのだろうか？

しかし。

「まるで、人間の生首みたいねえ。」

くすくすと笑うジョアンの言い草にラジャータがぎょっとした目線を向けたが、しかしその形容もあながち間違っていないとイリスは感じた。

その色は人間の血液に何度も浸したかのような真紅であるし、それに萼の根本で茎がぱつりと切り落とされた様と合わせてみると、まるで首から下を切られ血の涙を流す人間のようにみえてしまうのだ。悲痛で、残酷で、狂気に満ちて、そして何より、美しい…。

「...関係あるかはわかりませんが、お預かりしてもよろしいでしょうか？」

イリスが尋ねると、ラジャータはいいとも、と言って促した。

こんな花が手がかりになるかはわからないが、しかしイリスには先ほどのレビの様子も気がかりだった。

何か、知っているのだろうか。

けれども黒月姫の問いかけに答えなかったのなら、自分がもう一度問いただしたところで答えてくれることはないのかもしれない。

仲間たちを信じている。

けれども、心からそうだと言うには、まだ共に過ごした時間が短すぎるのかもしれない。

まだまだ、彼らについて知っていることはほとんどないのかもしれない。

王宮を後にして...各々に語りあい、あるいは地図を広げ、あるいはぼうっと空をながめ、そうしている仲間たちはいつものよく知っている面々のはずなのだが、しかしイリスにはなぜだか小さな胸騒ぎを止めることはできないのだった。

## ポウ邸宅にて

---

失踪したハヌイを捜すため一行は闇の森へと足を踏み入れた。

王室騎士団が捜索しなかったところも含めて手はじめに闇の森を捜索したが、やはりハヌイを見つけ出すことはかなわなかった。

そうこうして、その奥地にあるポウ邸宅に辿り着き今に至る。

「あ〜、なんかこんな環境だと、余計に疲れちゃうよ。」

どっかりと床に腰を下ろして、ムーウエンが言った。

「ここは霊の類の魔物が多いからな…。そういうのは、人の精神に障る。体力もだが、精神的な疲労も蓄積するから、休めるときにゆっくり休んだほうがいい。」

そう言うパーティでも随一の実力者であるカズノの額にも、疲労のためかじんわりと脂汗が滲んでいた。

闇の森から、ポウ邸宅へ。考えてみればずっと歩き詰めであった。

そしてラジャータの評通り、ポウ邸宅内の魔物たちは今のイリスたちでもぎりぎりのラインの強者ぞろい。いつ、更に強力な魔物が現れるとも知れないために、イリスたちは結界を張ってしほしの休息をとっていた。

一時的な効果とはいえ魔除けの陣が張れるのも、イリスのデル族の末裔としての力による。

「イリス、この陣はどれくらいもつの？」

弓と弓筒から解放された肩をぐるぐると回しながら、黒月姫がたずねる。

「う〜ん、ここは魔物の力が強いから、もって4時間くらい、かな…。」

「4時間か。まあ2時間ずつ交代で休めりゃいいところか。」

ふむ、と腕組みをしたまま、パンも床に腰を落ち着かせる。

「この屋敷…まるで人が住んでいたような跡があるけど、どうなんだろう…。」

「住んでいましたよ。大層な名家でした。もっとも、随分昔に滅んでしまいましたが。」

不安げなムーウエンとは正反対に、相変わらずレビは表情を崩さない。

「…アシャー家、だったわね。幾代にも渡って賢者や勇者を輩出した名家。でもそれは見せかけ。人の生き血を使った儀式で、その空虚な栄光を保っていた…。滅びて当然だわ。」

最後は半ば吐き捨てるように言ったジョアンの言葉には、明らかに刺があった。

「そちは相変わらず、正義感が強いな。」

そう言う黒月姫に、ジョアンは何も答えなかった。

しかし、イリスも時々感じていた。いつもは明るく、よく黒月姫をからかったりしてパーティの空気を明るくするジョアンだが、時々妙に冷たい雰囲気醸し出すことがあるということ。

今のように、それはおそらくはジョアンなりの『許せないこと』があるときに見受けられるのだが、そういう時のジョアンから発せられるものは、しかし黒月姫の言うような『正義感』というものともちょっと違うように、イリスには思っていた。



強いて言えばそれは、もっと暗くて、冷たい...『憎しみ』。

そして...

そこまで考えて、イリスは頭を振る。

王宮でのレビの様子を見てから、仲間のことに敏感になってしまっているのだと、自分を叱責する。

そうだ。全てを知らなくて当然なのだ。仲間の全てを知っているなんて傲慢、抱いてはいけない。全てを知らなくてもなお、皆を信じる...。遠い日に、自分自身に誓いをたてたはずじゃないか。イリスはそう、自分に言い聞かせた。

「イリス。」

そのとき、自らを呼ぶ声でイリスははっと現実に戻された。

顔をあげれば、目の前にカズノが立っていた。

「魔除けの陣にも力を使って、お前が一番消耗している。まずはお前が休め。」

そう言うカズノの顔は優しかった。

先刻のカズノの言葉が思い出される。霊の類の魔物の気は、人の精神に障るのだと...

確かに、そのとおりかもしれない。いろいろなことがあって、多少気疲れしているのかもしれない。

それを認めた途端、イリスの身をとてつもない疲労感が襲った。

今まで目まぐるしいことがあるばかりで気づいていなかった。けれども様々なことがあって...自分も少し、疲れていたのだとイリスは気づいた。

「ありがとう、カズノ。それじゃあちょっと先に、休ませてもらおうかな...。」

壁に寄りかかると、魔法にかかったようにすうっとまぶたが閉じていく。

最後にカズノが妹を見るように目を細めたのを見て、イリスは心地良い気持ちで眠りに落ちていった。

イリスは、夢を見ていた。

自分自身でも、これが夢なのだと知っていた。

乳白色の雲のようなものが敷き詰められた空間に、イリスは一人立っている。けれども息苦しさはない。熱くもない。寒くもない。不思議と、心は落ち着いていた。

水面のような静かに澄み渡った心でイリスはふと、思う。

私は、皆のこと以前に私自身のことさえ、何も知らない。

私のこの力は？使命とは？

デル族とは、何？

なぜ、引き継がれるはずのないデル族の力が、私に...

この世界は、一体...

その時、眼前にきらり、と輝くものがみえた。

この無の空間に、何かあるのだろうか。

そう思って、駆け寄る。

そしてその途中でイリスは気づいた。輝きを放っていたのは、鏡なのだと。

人一人すっぽり移せるほどの、大きな鏡。

その近くまで走りよって、しかしイリスはためらって足をとめた。

なんとなく鏡の中をのぞけば、見たくないものがみえてしまう気がしたから。

目をそらしてきた、本当の、自分。

でも。

私は、一体何者なの...？

一度胸にひっかかった思いは、さざ波となって心の平穏を乱していた。

イリスは一步踏み出して、鏡を覗き込む。

知りたい。本当の、自分を...

鏡を覗きこんだ途端、また目を覆う眩い光が、辺りを覆った。

はっとして目を覚ますと、そこは見慣れたすす汚れた屋敷の中だった。

「目が覚めたのですか。まだ交代まで時間がありますよ。」

微かに立てた音に気づいたらしいレビがこちらに柔らかい表情を向けていた。

辺りを見回す。

少し離れた場所でカズノが見張りをしているのがみえた。

そして他の仲間たちが目を閉じて横たわっているのをみて、休息をとっていたのだということ思い出す。

「レビとカズノが最初に見張りをしててくれたのね。」

「...ええ。まだ我々のほうが頑丈ですから。後半の見張りも女性とムーウェンだけでは何かあるといけないので、パンには先に寝てもらいました。」

「そう...。」

そこまで話したところで、イリスの脳裏にまたエリアスでの出来事がちらついた。

たずねるなら...今しかないのかもしれない。

そう思ってイリスは、おもむろに口を開く。

「あの...レビ。」

「...なんですか。」

なんとなく、レビは自分が何を聞きたいのかをわかっているのだろうとイリスは思った。

「何か知ってるのよね？この、薔薇のこと...。」

そう言って、道具袋から箱に入れて大事にしまっていた薔薇をとりだす。

レビは何も言わずに少し間押し黙る。

それからややして、彼にしては珍しく...少し言いにくそうにその口を開いた。

「イリス殿。もしこの薔薇が、私が知っている人の身につけていたものだとしたら...。」

レビの深いブルーの瞳が、伏せられる。

「私はその人と、戦うことはできません。」

その言葉を聞いても、イリスは自分でも不思議に思うほど、驚きはしなかった。

心は落ち着いていた。

「つまり、その人がハヌイさんが行方不明になった原因だとしても...ということ？」

「...そうです。」

イリスにはそれ以上、何も聞くことはできなかった。

レビには、心当たりがあるのだ。

今回の、この事件の。

けれどもそれと直接対峙するその時まで、その謎が解けようこともないことはイリスにはわかっていた。

イリスはぼんやりと、あの夢の中で見た...そして結局その中を覗きこむことができなかった、あの大きな鏡のことを思い出していた。

交代の休憩が終わる丁度その頃を見計らったかのようにイリスの張った結界はその効力を失う。待ってましたとばかりに魔物たちの群れが襲いかかってくるも、2時間ずつとはいえ休息をとった一行の前にはもろくも崩れ去って行った。

「ねえムーウエン、その地図おかしくな—い？」

再度探索を初めて小時間、ジョエがムーウエンが開いている地図を覗き込んで言う。

「本当だったらこのあたりに、一番大きな部屋があるはずでしょ？」

ジョエが言うことは正しかった。エリアスでラジャータから貰った旧アシャー家の地図には、このあたりに一番大きな部屋への入口があることを示している。

「うん、でも行き止まりになってるよね...ここに何もなくなると、ポウ邸宅内にもハヌイさんはいないってことになっちゃうんだけど...。」

ムーウエンが心配そうな声を出すのも無理はなかった。目の前を見てみればあるのは壁だけで、叩いてみても石の鈍い感覚が伝わってくるだけなのだから。

しかしその時だった。

目の前の空間が急にぐにゃり、と歪んだかと思うと仲間たちの姿を飲み込み、そしてイリス自身もまた、その空間の狭間に飲み込まれてしまったのだった。

————おばあさん、私もう、ここで駄目かもしれない。

イリスは一瞬、自らの死を覚悟した。

イリスは、まだ自分の身体に感覚があることに気づいた。

いつのまにか、目を固くつぶっていたようだ。

ゆっくりと、瞳を開ける。すると、そこは広い部屋だった。

「ここ、本来さっきいた場所から行けるはずの、一番大きい部屋だよ！」

ムーウエンの声が聞こえて、イリスは周りを見回す。

仲間たちもまた、一人残らずこの部屋に飛ばされてきていた。

ここがどういう場所だかはわからないが、ひとまずは安心だった。誰か一人でも欠けたりしたな

らば、気が気でなかっただろう。

しかしその次の瞬間、イリスは目を見張る。

部屋の隅にうずくまっているのは...

「ハヌイさん！」

やっと目的の人物を見つけて、イリスは思わず駆け寄る。

しかしその眼前数メートルのところで、バチッと何かの力によって弾かれてしまい近寄ることができない。

「あら、あなた意外と強欲なのねえ...。勝利する前に戦利品に手をだそうとするだなんて。」

「誰っ!？」

その時突然どこからか聞こえてきた声に、イリスと、そして仲間たちはすかさず構えをとる。

「ふふふ。相手に尋ねるときは自分から名乗るものではなくて？礼儀も知らないのねえ。でもいいわ、特別に許してあげる。私はあなたを知っているから。ねえ、イリス・イヴィエール？」

ヴン、と音がしてイリスたちの前に現れたのは豊かなブロンドのウェーブヘアとゴシックな衣装に身を包んだ女性であった。

「何なの、あなたは...。」

そこまで言って、イリスははっとした。目の前にいる女性...それが被っている帽子につけられた薔薇が、まるであのラジャータから預かった薔薇と同じだということに。

「ふふふ...私はパンドラ。真実という名の禁忌を司るアガシュラ...。」

「ア、アガシュラ!？真実？禁忌？この人、何を言って...。」

「とにかく、その爺を解放しなさい！」

たじろぐムーウエンの隣から、矢をつがえた黒月姫がパンドラを狙う。

「やあよ。さっきも言ったでしょう？こんなおいぼれでも戦利品なの。欲しければ、私を楽しませてくれなくちゃ...。」

そう言って、何が面白いのか、くつくつと笑う。

「...お前、一体何が目的だ？」

「やあねえ、カズノ・ナス。いい男が眉間に皺をよせるなんて。台なしだわよ？」

「何故、私たちの名を...？」

イリスが怪訝な表情を浮かべると、パンドラはまたそれが面白いというように笑った。

「私の目的は、最初からあなたたちなの。イリス・イヴィエール。あなたと、あなたの仲間たちのおもしろい噂をたくさん聞いたからねえ。見てみたくなかったのよ。人質でもとれば、来てくれるんじゃないかと思ったけれど、案の定。」

「そんなことのために、ハヌイさんを...？」

「勘違いしないでね、年寄り趣味なわけじゃないわ。誰でもよかったけれど...単においぼれのほうが簡単に術にかかってくれただけの話。わかった？だからこれはね、あなたたちのせいなのよ...。」

そこまで言われて、黙っている訳にはいかなかった。しかしイリスが声を発するよりも早く、パ

ンの怒号が響く。

「どさくさにまぎれて何いってんだ！俺たちのせい？お前が勝手に興味もって勝手に人さらいして誘いだしたのを俺たちのせいにするたあどういう...！」

「あらあら、威勢のいいボウヤなこと。イリス・イヴィエール、素敵な仲間が沢山いるのねえ？噂どおり、本当に素敵な仲間たち...」

パンドラはそこまで言ってから、堪えきれないといったように高笑いを始めた。

「な、何がおかしいの！」

「ねえ、イリス・イヴィエール。あなたまだ出会って間もない、知らないことだらけの仲間を...あなた自身を...本気で信じられているの？」

急に思ってもみないことを、そしてここ最近ずっと心の端に引っかかっていたことを指摘されて、イリスはたじろいだ。

「な、何を...」

「ふふふ...嘘、つけないのねえ。」

満足そうに舌なめずりするパンドラ。その黄金の瞳には、次第に狂気の色が浮かびあがっていた。

「なら教えてあげましょうか？こうやって対峙していたとしても...あんたたちの中でこの私と本気で殺り合う気があるやつなんて、せいぜい半分しかいないってことよ！」

パンドラが叫ぶと同時に、インテリアかと思われた部屋に飾られた剣がひとりでに浮き上がり、一直線にイリスに向かった。

「イリス、危ない！」

そうは言うものの、今からでは逃げる術がないのは明らかであって、イリスは反射的にぎゅっと目をつぶった。

しかしその時だった。

二発の破裂音がして、その後カランカラン、と金属が床に落ちる音が響く。

おもむろに瞳を開ければジョアンがふう、と石弓の銃煙を吹き消しているのが見えた。

「全く困るわねえ。こっちにはこっちの予定ってモノがあるのに。」

ジョアンがパンドラを睨みつける。

パンドラは少しの間そのジョアンと睨み合っていたが、やがて、

「そう...。そういうことなら、良いわ。」

と、苦々しく言い放った。

それからイリスの方を見てまた面白そうに笑みを浮かべる。

「...それじゃあ、イリス・イヴィエール。ここまで来てくれたあなたに、プレゼントがあるの。」

言葉の意図が読み取れず、イリスは一步後ずさる。

そしてパンドラがパチリ、と指をならすと時空が歪み、パンドラの背後に何かが浮かび上がってくる。

「これは...」

イリスは思わず息を飲んだ。

目の前に現れたそれは...イリスが夢の中で見た、あの鏡だったからだ。

「これはすべてを映す真実の鏡。そして決して覗いてはならない禁断の鏡...。あなたが望むならば、映してあげるわ？あなたや、あなたが『仲間』と呼ぶ人間たち...。その、本当の姿を！」  
高らかに笑うパンドラ。

明らかに、イリスが迷いを感じていることを見透かしているのだ。

「わ、私は...」

迷いを感じている自分が、イリスは許せなかった。

けれども、レビのことや、昨日の夢のこと、様々なことが頭をちらついてしまう。

嘘だと信じたくても、パンドラの言葉が脳裏からはなれない。

パンドラと本気で戦う意志のある人間は、半分しかいない？

一人はおそらくはレビとしても、あとの人間は？

もし本当ならば、それは...

「私は...」

もう一度、口を開く。

でもつかえてしまって、思うように言葉がでてこない。

嘘だと信じたいのに、信じきれない自分に気付かされ、絶望する。

そのとき。

「人の心を惑わす物の怪め！覚悟！」

その隣から、黒月姫がアルジュナにつがえた矢を放った。

矢は輝きながら一直線に鏡へと突き刺さり、光の亀裂が入ったかと思うと、鏡は音をたてて飛び散る。

「そう...。ことごとく人の遊びを邪魔するのね。なら、しょうがないわ。別の遊びを考えましょう...！」

いつの間にかパンドラの姿は消えていて、どこからか静かな、しかし明らかに怒気を含んだ声だけが響いた。

今まではとは比べものにならないくらい、恐ろしい声。

すると、たった今飛び散った鏡の破片が宙に浮き、そして今度は一直線に黒月姫を狙った。

「黒月姫！」

皆が声をあげるも間に合わず、黒月姫は煌く鏡の破片に全身を射ぬかれる。

黒月姫の身体はその衝撃で浮き上がり、やがて地面にたたきつけられ、動かなくなる。

しかし、その体からは一切の血が流れない。

「い、一体、何がどうなってんだ...？」

さすがのパンも少し不安の入り交じった声で黒月姫を覗き込む。

その時、ゆらり、と全身に傷をうけたはずの黒月姫が起き上がり、思わずパンは「おわあ！」と後ずさった。

「...あなたに、傷つけることができるかしら？あなたが、仲間と呼ぶ人間を！」

立ち上がってそう言った黒月姫の目には、狂気の色が宿っていた。

黒月姫には...パンドラが宿っていた。

黒月姫はその名弓アルジュナに幾本もの矢をつがえ、イリスたちに狙いを定める。



## 決意

---

「一体、どうしてこんなことに...。」

パンドラに乗り移られた黒月姫の攻撃を、ただただ避けることしかできないイリスたち。  
なんとか頭をめぐらして活路を探るも、いい案が浮かばない。

「あの鏡が本体だったってところか。その身を射ぬかれて、腹いせに乗り移った...。子供みたいな奴だな。」

と舌打ちするカズノ。

「でも一体どうすれば...。」

ムーウエンの言葉に、ジョエがあっ、と思いついたように声を出す。

「アガシユラも同じかはわからないけど。別の物体に宿った精霊は、その物体が衝撃をうけると、そこに留まることはできなくなっちゃうの。だから...。」

「おお！じゃあよくある操られたやつに体当たりすればいいっていうのはあながち間違いでもないのか。」

これで道は拓けたとばかりに喜ぶパン。

しかしそうは言っても。

黒月姫は百発百中といっても過言ではないほどの弓の名手。

五本同時につがえた矢をそれぞれの的に命中させることなど、造作も無いことなのだ。

加えてパンドラが乗り移ったためか、いつもの彼女とは思えないほどの身体能力を発揮している。

本気で向かってくる黒月姫と、人数はいるとはいえ戦うことを許されないイリスたちでは明らかに分が悪かった。

「いつまで逃げまわるつもり！最後には逃げ切れなくなって、結局仲間を傷つける癖に！自分のせいじゃない、仕方なかったんだと慰めあって！そうやって最後には可愛い自分の身を守るのが、オマエタチニンゲンナノニ！！！」

そう叫ぶ黒月姫...パンドラの言葉と同じようなことを、イリスはどこかで聞いたことがある気がした。

『許せないこと』への圧倒的な憎しみ...そして、そう。それと同時にイリスはあることに気付く。

何よりもそこにあるのは、深い悲しみなのだ。

何故？

そんな思いが頭をもたげるも、ますます勢いを増した黒月姫の猛攻に、そんなことを考えている暇はすぐになくなる。

と、そのとき。

床を蹴って、誰かが黒月姫の方へ走るのが見えた。

「レビ！？危ない...！」

それはレビだった。

止めるまもなく、レビは一直線に黒月姫の方へ走っていく。

それに気づいた黒月姫が素早い手つきでレビに向けて矢をつがえるも、一瞬、その手がためらったかのようにイリスには見えた。パンドラが、宿っているにも関わらず。

しかしそのお陰で手元が狂ったのか、その後に打たれた矢もレビの右頬をかするにとどまった。

レビはそのまま一直線に、黒月姫を半ば抱きかかえるようにしてぶつかって行った。

一瞬の出来事に、誰もが目を見張る。

そしてその直後、ジョエの言うとおりに...黒月姫の中に留まることのできなくなったパンドラが姿を現し、気を失った黒月姫を横たわらせたレビを睨みつける。

「レビ、お前は私に逆らうというの？私と契約したお前が...ッ！」

アガシュラであるパンドラとの契約。それがどういう意味を持つのか今のイリスにはわからなかったが、けれどこれが、レビが言っていたことの原因なのだろうとイリスは確信した。

「私はパンドラ様、あなたと契約しました。ですから、あなた様に刃を向けることは致しません。けれど...。」

「けれど、何！」

焦れたいように捲くし立てるパンドラ。

ことごとくうまくいかずに、相当気が立っているように見える。

「イリス殿とその仲間を守り、任務を遂行する。それが私に課せられた使命です。大切な仲間たちを...私は、守りたい...！」

「そう...そういうことを、言うの...ッ！」

もはや頭に血の登ったパンドラは残る全エネルギーを結集させる。そのエネルギーをうけて部屋中が荒れ始める。

そして一方、イリスはレビの言葉に自分の中の何かがふっきれるのを感じていた。

...そうだ。自分は、何を迷っていたのだろう。

ムーウエン、ジョエ、カズノ、レビ、黒月姫、ジョアン、パン。

一人も欠けてほしくない、大切な仲間たち。

何があるかわからない。

本当にパンドラの言うとおりに、皆でずっと一緒にいられるわけではないのかもしれない。  
それでも。

よし、と意を決してイリスは目を見開く。

「パンドラ！」

先程までとは違う、強い意志のこもった声色にパンドラは思わずイリスの方を振り向く。

「私...弱かった。弱かったから、ちゃんとあなたに言うことができなかった。でも、今なら心から  
そう言える。私はみんなを信じている！だから、真実を映す鏡なんて...いらない！」

そう言い放つと同時に、イリスの弓から白く輝く光の矢が放たれる。

その矢はまっすぐにパンドラを打ちぬき、と同時に、イリスたちの眼前を眩い光が包み込んだ。

白い光で何も見えない中、イリスはパンドラの声聞いた気がした。

—————いつか、その言葉を後悔するときに、きっとくるわ...

## エピローグ

---

気がつけば、イリスたちはエリアスの出口に倒れていた。

誰一人、欠くことなく。

そして今回の事件のきっかけである、ハヌイも一緒であった。

ハヌイを含めて、命に別状のあるものはなかった。

だが、その身を乗っ取られていたとはいえ味方と対峙しなければならなかった緊張感。

それからもたらされた疲労感は一行為に数日の休養を余儀なくさせた。

それからエリアス王室にハヌイの無事と、ポウ邸宅のアガシュラの目的は自分たちであり、今後エリアスを攻撃することはおそらくはないだろうという旨を報告すると、ラジャータは大層喜んで、手厚くイリスたちをもてくれたのだった。

そんなわけでイリスたちは数日の休養の間、何一つ不自由することなく過ごすことができた。

そして...

「また、暑いところに逆戻りか〜。」

離れると決まれば、名残惜しそうに言うムーウェン。

しかしずっと休んでいるわけにはいかない。

イリスたちには、やるべきことが...もっと大きな使命があるのだから。

「次の目的地はベスだったわね。」

パンドラに身体を乗っ取られた影響からかしばらくは弱っていた黒月姫もすっかり回復して、今ではこうして次の目的地の地図を開いている。

「それにしても姫さま、パンドラに乗り移られててもよくレビを撃たせないようにがんばりましたねえ。よっぽど好きなのね〜。」

そして相も変わらずそんな黒月姫をからかうジョアン。

「なっ、も、もうその話はよいではないか！とにかく...あ〜もう！あの時のことはさっぱり覚えてないのに...！」

真っ赤になって言い返す黒月姫。周りは、自然と笑みが零れる。

タウンポータルでエルパまで戻り、そこから今度はベスに向けて旅立つ。

きっともうしばらく、エリアスにくることはないだろう。

そう思うと、少し名残惜しい。

でも、とイリスは思い直す。

こんなに沢山の仲間たちが一緒にいてくれるのだから。  
だからきっと、どこに行っても、何があっても...大丈夫。  
今ならば...信じられる。

そしてふと、仲間たちから大分遅れていた自分に気付く。

「ほら～イリス、タウンポータルはいるよ！一人だと、タウンポータルも使えないんだから！」

いつの間にか先にタウンポータルまでたどり着いていたムーウェンが手を振っている。  
響き渡った声で道行く町の人々が笑うのが見えた。

「そ、そんなことないわよー！」

上気する頬を感じながら、イリスは愛する仲間たちの待つ場所まで走るのだった。

全てを、知ることはできない。

全てをわかりあうこともまた、できない。

それでも、仲間だから。

今を共に生きる...かけがえのない、仲間だから。

たとえ真実の鏡が不吉な『真実』を映しだしたとしても。

たとえ悲しい出来事がこの先にまっとうとも。

さらにその『先』の未来はきっとかえることができるから。

だから今、できることは。

信じること。

ただ、それだけ。

【終】